

いずみ

第21号

2007年10月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 21



《勇払千人同心》

(苫小牧市文化会館前庭
ブロンズ・石 高さ8尺)

今から200年余り前の1800年(寛政12年)、苫小牧・勇払の地に入植したのが八王子から来た千人同心の人たち。苫小牧市が1973年(昭和48年)、開基100年に当たりこの地の開拓の先駆者として永久に顕彰するために建立した。

碑には同心の一人、河西裕助が幼児を残し、若くして病没した妻・梅女への哀惜の情を詠じた詩が刻まれている。

(写真・文 仲野三郎)

目 次

本郷新彫刻シリーズ 21 「勇払千人同心」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
『芸術・文化フォーラム』をめぐって 原子 修	3
ミュージアムの窓辺から「後藤純男 北海道を描く一」 行定 俊文	4
第 13 回本郷新賞 前田哲明氏に	5
ブロンズ彫刻の制作現場を取材	6
2007 年度友の会アート・バスツアー	7
「黒田清隆とホーレス・ケプロン像」	8
リレーエッセー「伏木田光夫」/ギャラリーシリーズ 16 「石狩美術館」	9
本郷新のちょっといい話 9 「啄木像の坐像と立像」 仲野三郎	10
投稿「胸襟を開いた話し合いを」	11
札幌芸術文化財団理事長に申し入れ ほか	12

本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（10月—12月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
<p>▼第 13 回本郷新賞 受賞記念彫刻展 8月25日—10月14日</p> <p>▼形の復権「形—景観と象 徴の狭間で」(貸館) 10月20日—11月11日 出品は國松明日香ら5人</p> <p>▼後期収蔵品展 「本郷新と野外彫刻」 11月17日—3月30日 本郷新のエスキースほか</p>	<p>▼野外彫刻展 8月25日—10月14日</p> <p>▼後期収蔵品展 「釣り人・抜海」 10月20日—3月30日 釣りが趣味だった本郷の 魚拓の絵や釣り仲間、風 景などの作品を展示す る。</p>	<p>▼ステージV 「三角山と大倉山 の縦走」 10月27日</p>	<p>▼造形教室(テラコッタ) 10月13、14日</p> <p>▼サンクスデー秋のコン サート 11月3日</p> <p>▼クリスマスコンサート 12月23日</p>

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」
山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩10分

「芸術・文化フォーラム」をめぐる…

あれは、木々の芽がふくらみ、春の光がそよ風をよびさます頃のことだったでしょうか…札幌にも、芸術や文化にかかわる人々のつながりをつくろう、という呼びかけがあったのは。

もともと、札幌は、芸術や文化のよく似合うまちです。

豊平川のせせらぎ…時計台の鐘の音…ライラックの花の薫り…オーケストラの美しいしらべ…街なかの彫刻のたたずまい…

とりわけ、最近では、市民派の上田市長の登場で、いっそう「芸術・文化の花咲くさっぽろ」の気運は、盛りあがりを見せております。

今こそ、市民主導の、新しい芸術・文化の息吹を世界に向けて解きはなつ絶好のチャンスではなかろうか…という熱い想いにもえる「創り手」と「支え手」が、手をたずさえ、市長といっしょに、語り、行動すべきではなかろうか。

そのような雰囲気が一気にたかまって、「芸術・文化フォーラム」の呼びかけがはじまり、呼びかけ人会議が形をなし、雪どけのはじまる頃には、「芸術・文化フォーラム」の呼びかけ人会議が発足したのです。

早速、これからの札幌の芸術や文化のあり方についての幅広い市民の方々の声を、直接市長に届ける「一言メッセージ運動」がスタートしました。

そして、寄せられた 190 通のメッセージは、「文化施設に関するもの」「文化活動の展開に関するもの」「文化予算に関するもの」「アイヌ文化に関するもの」「芸術・文

原子 修 (詩人・札幌大学名誉教授)

化への応援に関するもの」の 5 つの観点から、これからの札幌の芸術・文化のあり方についての真剣な想いにみちあふれたものでした。

そのメッセージを市長に渡すことを含め、札幌で生まれた音楽や詩の発表、さらには、市長を含む 8 名の発言者によるフォーラムなど、「札幌を芸術・文化のあふれるまちに」をテーマとする、第 1 回芸術・文化フォーラムが、7 月 25 日 (水) 午後 6 時半から、時計台 2 階ホールで、約 160 名の市民参加のもと、開催されました。

「市長とおしゃべりしませんか？」という市の事業と連けいしたこのフォーラムでは、幕開けを、いきなり、ピアノ演奏と詩の朗読とする、という、感動最優先ですすめられたのも、特徴的でしたが、詩が、わたしの『札幌の彫刻をうたう』という詩集の序の詩「札幌のまちは美しい」であった、ということも、札幌彫刻美術館の友の会の皆さまの日頃のご活躍ぶりを拝見しているわたしにとってはうれしい限りでした。

「創り手」と「支え手」の共働 (コラボレーション) で、札幌ならではの手づくりの芸術や文化を、豊かに創造し、楽しく享受し、しっかり発信していき…さらに、1 次文化 (地元で創造する文化) を 60 パーセント以上にして 2 次文化 (他の地域からの移入する文化) とバランスをとるためにも、これからの芸術・文化フォーラムの活動は、札幌で生活し、札幌を芸術・文化活動の拠点とする人々の指針となり支柱となることが期待されているのではないのでしょうか。

「後藤純男 北海道を描く 北海道で描く」

後藤純男美術館館長 行定 俊文

昭和5年、千葉県の寺に生まれた後藤純男は、本来ならば僧侶となり生家の寺を継ぐところ、それを辞し日本画家への道を選択した人である。極貧の生活の中、志をもって受験した東京美術学校（現：東京芸術大学）は、2度受験に失敗。順風満帆とはいえない状況であったが、日本美術院同人・田中青坪に師事する好機を得たことで、純男も日本美術院展覧会（院展）に出品するようになった。風景画家として歩みだしたものの、何処へ行くにも、何をすることも金の工面が問題となり、家から程近い江戸川の田園地帯を描くほかなかった。変化に乏しい風景を、如何に絵にするのか。純男の視点は時間や季節が移り変わる微妙な変化を捉え、更には風景に自身の心を重ねるといった誠実で丁寧な作業を繰り返すようになり、昭和27年「風景」で念願の院展初入選を果たす。

昭和35年、純男はかねてから憧れを抱いていた北海道への取材旅行を敢行した。関東平野の只中で育った純男には、厳しい気候風土が育む自然は衝撃的であり、特に層雲峡では人生観を変える感動があった。北海道の自然に身を投じることで、純男の強靱な精神は活路を見出し、やがて圧倒的な存在感が静寂さをもって画面上に出現するようになる。約10年に亘った北海道取材が結実した一連の作品は溪谷瀑布シリーズと

も呼ばれ、院展で大観賞や奨励賞を連続受賞するなど、後藤純男が日本画壇に頭角を現すきっかけとなった。

雪は永遠のテーマと語る画家が、道内取材の拠点として「アトリエを建てるのは、ここ以外に無い」と即決したのが、現在当館が在る場所である。十勝岳連峰を東側に望み、西側には富良野地方特有の丘陵地帯が広がるこの地に、平成3年にアトリエを、「雄大な自然の中で自作を鑑賞して頂きたい」との願いから平成9年には《後藤純男美術館》を建てた。

今夏、画家はここ上富良野で過ごし、9月に始まる院展の出品作「初桜遊行俯瞰図」の制作にあたった。金屏風に一面の桜。シンプルな画面構成であるが、描かれた夥しい桜の花びらから作家の意気込みが伝わる。かつて隆盛を極めた華やかな日本画壇を彷彿とさせる世界に、「日本画ならではの表現が見直されると良いですね」と水を向けると、「ただ描きたいから描いているだけだ」と穏やかな笑みを浮かべる画家。激しく生き抜き、描き抜いてきた人であるからこそ、喜寿を迎えた今、新たなる境地に足を踏み入れたことを予感させる。まだまだこれからである。



後藤純男美術館 上川管内上富良野町東4線北26号 ☎0167-45-6181

◇開館時間：午前9時—午後5時 年中無休（ただし展示替えて臨時休館する場合があります）

第13回本郷新賞

前田哲明氏(東京)の「^{こうじゅ}煌樹」に

JR 栃木駅前ステンレスモニュメント



彫刻家・本郷新の業績をたたえて隔年に実施している第13回本郷新賞は東京在住の前田哲明^{のぶあき}氏の「煌樹」に決まり、8月24日、札幌・宮の森の本郷新記念札幌彫刻美術館で贈呈式が行われた。また、受賞作家の作品展と関係資料展が10月14日まで同館で開催中。

本郷新賞は同美術館と財団法人札幌市芸術文化財団、同賞運営委員会の主催。2005年1月から06年12月末までの2年間に全国のパブリックスペースとしての広場、公園、街路、公共建築物などに設置された彫刻作品が対象で、選考委員は彫刻家・國松明日香氏ら5人。



受賞作「煌樹」は栃木県栃木市、JR 栃木駅の北口駅前広場にあり、同市のシンボルである栃の木をモチーフにしたステンレス、積層ガラス製、高さ7^m、横8.5^m、奥行き8.5^mのモニュメント。2005年の制作。候補作品36点の中から選ばれた。

前田氏は1961年、東京生まれ。東京芸大卒。97年、文化庁の芸術家在外研修制度による研修員として1年間、ロンドンに在住した。現在、東京を中心に個展、グループ展で活躍している。2001年には第19回現代日本彫刻展で大賞を受賞するなど、若手作家の成長株と言われている。受賞作は「ダイナミックな形を支える力強い構造が特徴で、爽やかな空間的な広がり印象的」(酒井忠康選考委員)と評価された。

これまでの本郷新賞

第1回	「風の又三郎群像」	金子健二ほか	岩手県花巻市ギンドロ公園
2回	「水の広場」	環境造形 Q	名古屋市名城公園
3回	「地上より」	塚脇 淳	兵庫県三田市城山公園
4回	「捷」	國松明日香	札幌市厚別公園
5回	「Commencement and Peace」	養田哲日児	東京都千代田区紀尾井町ビル前庭
6回	「風待ち」	渡辺行夫	胆振管内洞爺湖町浮見堂公園
7回	「連山夢想」	眞板雅文	倉敷市 JR 児島駅前
8回	「那の津往還」	豊福知徳	博多港中央埠頭緑地モニュメント広場
9回	「my sky hole 97-2 水面への回廊、琵琶湖」	井上武吉	大津港シンボル緑地公園
10回	「風門」	澄川喜一	島根県立美術館松江湖畔公園
11回	「時の地層」	土屋公雄	和泉市和泉シティプラザ
12回	「時空・140-旅人-」	石井厚生	東京都八王子市多摩美大

ブロンズ彫刻の制作現場を取材

田中 和子(会員)

今年度の友の会の DVD 制作は「彫刻のできるまで」。芸術家の協力を得て、原型作り、鋳型形成、鋳造と進む制作作業の撮影現場を取材した。原型作りは札幌在住の椎名澄子さんで、東京芸大彫刻科と大学院で学び、個展やグループ展で活躍する若い作家。今回のデッサンには幼稚園時代の愛らしい息子さんの顔があった。

原型は塑像板にL型の鉄を固定し、15センチ程の角材を縦に縛って心棒を作り、それに粘土をからみつけ、叩きながら頭の大きさにする。輪郭作りでは顔に十字を入れ、目、鼻を整え、ベレー帽を形作る。迷いのない、細かい手さばきで顔ができた。

10日後、石膏作り。頭部に朱筆で型となる部分に線を入れる。「抜け勾配」と言い、確実に型を抜くための線で、型は8つ。線に沿って幅4、5センチの切り金（真ちゅう）を差し込んでいくが、頭や顔に切り金が刺さった光景にびっくり。椎名さんは笑いながら手を休めることなく、切り金の高さまで石膏を塗り、雌型を作る。石膏が固まったら表面を1時間ほどかけて丁寧削る。石膏の型作りはかなりの手間と神経を使う仕事で、彫刻家でもプロの職人に依頼することがあるそうだ。

次の蠟型取りは小樽の水谷のぼる氏のアトリエで。石膏型を組み合わせ内側に筆でサラダ油を、ついで蜜蠟を塗る。その後、溶かした蜜蠟を首の開いているところから流し込み、数分おいて、また、蠟を戻す。

ガスにかけられた鍋に湯せんした蠟があり、さながら調理場の雰囲気。その後、慎

重に石膏を外すとチョコレート色の男の子の蠟型が完成し思わず拍手。椎名さんは温めたカッターを使って蠟型の修正に取り組む。「ここからはかなり時間がかかる」と促されて帰宅。



緊張感が走る鋳込み作業

翌日も水谷氏のアトリエで、溶かした金属を流し込む湯道付け。これはイタドリの枝を使い、ガスを抜く道をつける作業。6日後、水谷氏の所で鋳型用の石膏作り。このあたりでもう何度型を取ったのか分からなくなった。

制作工程終盤の鋳型焼成（蠟の溶出）と鋳込み作業は江別の菅原尚俊氏のアトリエで行った。12人の作家が参加し、それぞれが持ち込んだ石膏鋳型を焼成窯に入れ、約700度、28時間かけて蠟を溶出する。さらにドラム缶ほどの大きさの溶解窯に火が入ると轟音とともに温度が上がり、銅と錫、亜鉛の溶けた炎が勢いよく上がる。つなぎ姿の菅原さんがゴーグルをかけ、皮手袋はめて柄の長いひしゃくで窯の湯を混ぜる。温度が1200度くらいになると炎が緑色になり、すくうと湯は流動し、オレンジと緑色に変化する。石膏鋳型に次々と湯を流し込んで鋳込み終了。冷却後、型を壊して作品を取り出す。このあと石膏を再利用するためブルーシートを敷き、白い粉が舞う中、全員で石膏を砕き始めた。

一連の行程を見学しながら、ブロンズ像制作の難しさとともに、仲間たちが互いに助け合いながら作業を進める姿に彫刻家たちの芸術への並々ならない熱意を感じた。

「ダリ」「モディリアーニ」の芸術を堪能

2007 年度友の会アート・バスツアー

友の会主催の 2007 年度アート・バスツアーが 8 月 1 日に催され、一般参加を含め約 40 人が参加した。この日は道立近代美術館で開催中の「ダリ展 創造する多面体」を鑑賞したあと、芸術の森に移動。芸術の森美術館主催の「モディリアーニと妻ジャンヌの物語展」、さらに、同時開催中の「アフリカの仮面と彫像展」、さらに隣接の関口雄揮記念美術館で日本画を味わうなど、終日、精力的に美術展をこなした。参加した 4 人にそれぞれの感想を寄せてもらった。



道立近代美術館では浅川泰学芸部長が鑑賞前にレクチャー

魅せられたダリの芸術

北野 敬子

8 月 1 日の彫刻美術館友の会ツアーは夏の日差しもさほどきつくもなく有意義な一日でした。近美ダリ展の不思議な魅力、また、芸術の森でのモディリアーニと妻ジャンヌの物語展では複雑な夫婦関係の中での名画制作の足取りを觀賞、アフリカ仮面展では芸術の原点を感じ、感動しました。さらに、最後に心和む日本画家・関口雄揮の記念美術館をめぐり、心地よい疲れを感じながら帰途に着きました。ありがとうございました。

哀愁のモディリアーニ

本間桃詩子

芸術の森美術館でのモディリアーニ、あの哀愁はずっと好きでした。そして妻ジャンヌの切ないまでの彼への愛に心を打たれました。アフリカ仮面のコレクションはとても幸せなひとときでした。関口雄揮さんの「樹間」「暮れゆく原野風景」は温かでした。私は観ることが大好きです。楽しい一日ありがとうございました。

素敵な美術の一日に

齊 恵子

「モディリアーニと妻ジャンヌの物語展」と「アフリカの仮面と彫像展」、また、つり橋を渡り、静かなたたずまいの「関口雄揮記念美術館」では北海道の自然を描いた日本画の素晴らしさを味わいました。曇り空でしたがとても良い美術鑑賞の一日でした。

おいしい企画

前田千恵子

おいしい企画のバスツアーでした。札幌に住みながら、なかなか一度に足を運ぶことができない 3 ポイントをうまく線で結び、ダリ、モディリアーニとジャンヌ、関口雄揮の絵を堪能した一日でした。友の会の皆さまにはお世話になりました。

黒田清隆とホーレス・ケプロン像

中野 北溟（書家）

近頃私は、住む札幌の大通公園に設置されている黒田清隆とホーレス・ケプロンのブロンズ、その立像に魅せられている。台座を併せると6～7mにもなろうか。とても大きく高いので、間近では全容がつかみづらい。しかし、互いに距離をおいてはいるが、引き合うように並んでいて一体感がすこぶる強い。昭和42年に開道百年を記念して建立されたのである。

◇

黒田は鹿児島の人、明治のはじめ北海道開拓長官として、またケプロンはアメリカから来日し、顧問として開拓の大業に参画したのだ。黒田は開拓の知識を先進国に学ぶ必要性を痛感し、海外に赴いて知見を広め、一方ケプロンは、多くの外国人技師を指揮して、北海道の実情を究め、卓見と豊かな経験のもとに基本政策を樹立し、黒田はケプロンの進言を採り入れて北海道開発の巨歩を進めたのである。

黒田の像は、右脚を半歩ばかり踏み出すようにして、左の掌は腰に深くおいて力をみなぎらせ、右腕をやや伸ばすように前方に、その親指は軽く握りしめられている。

突き出すように胸を張りながら結ばれたその口もと、その全体が一つになったポーズはまことに意志的である。一方、ケプロンも両脚をやや開いて右脚を前にし、右腕は軽く宙にのべ、その親指と人差し指そして中指と結び合わせて小さな輪をつくり、左腕は折り曲げて体に添え、人差し指を胸のところにおいて何かを示唆しているかのようでもある。前方を凝視するようにしな

がら思索の面影を思わせ、また一種の気骨も感じさせる。両者ともに背筋がピンと伸びて、力を漂わせると同時に、遙か西の方の山々を背に取り込んで、なおも屹然たる様相を呈している。犯し難い存在感は北海道発展の歩みと重なって多くの人々を深く引き付けてやまないのである。

◇

碧空には一片の白雲がゆったりと流れている。三々五々、ひろがる芝生に体をのぼしている人達。ベンチに腰をおろして噴水に涼む人達。イタヤカエデが枝を伸ばし葉をひろげた樹陰を散策する人達。ここ大通公園は、訪れる人々の安らぐ大きな場である。そういう中にあくまでも無言の佇まいをつづけている二つの立像。ある日、台座の石肌に手を触れながら、そのすぐ真下から立像を仰いだ。そそり立つように大空に向かって伸びていく姿は、なおも一点にしぼられながら天を突き、遂には巨大なものと一体となっていくようでもあり、また、ただよう白雲といっしょになって、天空をゆっくり回転でもしているかのような錯覚にとらわれるのだ。不思議である。北海道150年になんなんとする時間が音律を生み、それが層を重ねるようにしてひろがっていくではないか。

腰を曲げ、背を丸め、前のめりになって、せかせか歩く私の日常を思うのだが、黒田そしてケプロンの両像に接すると一瞬ハッ！とさせられる。きっと言いようのない厳かな私の意識なのであろう。

（筆者主宰の会報「天擘」より転載）

最晩年の本郷さんのダンディな白髭もなかなかのものだったが、少し尖った顎のその前の時代の顔も良かった。僕が2年間のヨーロッパの勉強を終えて、1971年、札幌時計台画廊で個展をしようと、首に手拭を巻いて額入れをしていた時、ぶらりと本郷さんと本田明二さんが「ヨウ、伏木田君、腰が曲がるくらい作品背負って来たんだって？」と入ってきた。その時、本郷さんが髭のない尖った顎に手をやりながら、「うらやましいな、こんなに仕事ができる…」と言った言葉が忘れられない。芸術家のこの種の無垢な言葉ほど鋭いものはない。僕はいつべんに本郷新の初々しい感性の虜になった。その足で3人は連れ立って、当時まだススキノに店を出していた三州屋に歩いて行った。本郷さんが「なにがなんでも伏木田に溪流釣りを教えなくちゃ」ということになって、ヤマメ竿を買ってやるというのだった。7月の古平川の水に立ちこむと、冷気に満ちていた。本郷さんも本田さんも餌をつけない毛鉤釣りであったが、僕には大きいミミズをつけてくれて、ゆったり沈めるように釣れということだった。1時間過ぎてもピンともカンともいわない、とその時、ガツンと来た。遠くで本郷さんと本田さんが「竿を立てろ、竿を立てろ」と叫んでいる。本郷さんが駆けてくる。虫達の羽音が聞こえる。(次回は本田泉さんにバトンいたします) =原文のまま=



ギャラリーシリーズ 16

石狩美術館



今年6月1日、「自然との共生」をコンセプトに、石狩市に美術館が誕生した。アール・デコの画家ルイ・イカールのエッチング作品を中心に、自然主義を追求したアール・ヌーヴォーを代表するエミール・ガレ、ドーム兄弟のガラス作品、そして日本のガラス工芸を代表する黒木国昭の作まで幅広く収蔵している。美術館の代表の小松燿さんは、40年前、パリの画廊で一枚の銅版画に心を奪われた。以来、仕事の合間を縫ってイカールの作品を探しに渡航し、「イカール収集家」として各国の画商から連絡が入るまでになり、現在イカールの生涯にわたる作品の約85%を収蔵し、世界一のイカール収集美術館を開設するはこびとなった。エッチング作品の数は400点にのぼり、ガラス作品含め1,100点余り収蔵し、そのうち約600点が展示され、適時入れ替えが予定されている。8月に美術館情報の第1号を発行し、9月の第2号からは作品の紹介が掲載されている。リーフレットで「美と光の芸術空間」とうたうように、他にあまり例のない自然界の光をかもし出す「ウェーブ照明」によって、作品の最も美しい瞬間を発見することができる。旧石狩開発の本社ビルを改装した大きな建物の三階に展示室の入り口があり、三階から一階へと回廊を巡りながら鑑賞できる。途中二階の中央に立つと、巨大な万華鏡を覗き見るような素晴らしい体験ができる。
(太田市子・会員)

場所：石狩市新港中央1丁目710 ☎0133-60-4111

開館：午前10:00~午後6:30(入館6時まで) 水曜日休館(祝日の場合その翌日)

市営地下鉄麻生駅5番出口(ダイエー寄り)からシャトルバス運行

第11話 啄木像の坐像と立像

モニュメンタルな作品を、その時その場所にあるべき姿として作り出す本郷新の造形力は素晴らしい。道内作品は95だが、同一人物の作品は啄木だけだ。「潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜薔薇よ 今年も咲けるや」と詠んだ函館の大森浜。ここの啄木像は坐像だ。釧路の啄木は立像、今にも歩



函館大森浜海岸の啄木像

き出さんばかり。明治41年1月21日、雪の釧路に一人降り立った啄木は今宵の宿を目指して駅から歩いて行ったという。啄木の詩はラブソングのお手本だと言う人もいるが、多くの方が啄木の詩に引かれる。啄木の碑は全国に165基もある。つまりそれだけ啄木ファンが多い。

そうした多くの人々が感動とともに共感をもって見る啄木像。そこにあることに違和感がない。いや、そこにそうしてあることに多くの人たちがあるべき姿として受け入れているということは素晴らしいことであり、すごいことだ。

本郷新が啄木を愛し、啄木の詩を自分の心とし、全力をあげて表現したその結果が、見る人に感動と共感を与えるのだと思う。

このような素晴らしい啄木像を持つ函館と釧路。この2都市を本郷新の彫刻で結んで旅をすることができるので紹介しよう。

函館を発って海岸線を北上すると本郷新の作品が次々と見られるのをご存知だろうか。

長万部町に5（平和祈念館）、伊達市に3（開拓記念館）、室蘭市



釧路・港文学館前の啄木像

に1（八幡神社）、苫小牧市に2（市内5カ所）、浦河町に3（荻伏支所）、白糠町に2（2公園）、釧路市に4（市内4カ所）の各作品が設置されていて、全部で20作品にもなる。このほか長万部町の平和祈念館の中には本郷新のエスキースがあり、八雲町には何んと本郷新の息子、堯さんの子牛の像も見ることができる。

同時にこれらの場所では、本郷新とともに新制作協会で活躍した作家をはじめとして道内のほとんどの作家の作品も楽しむことができるので、魅力的なツアーになると思うのだが、いかがだろう。ぜひ実現したいものだ。

あなたはどう思う？ 友の会の拠点美術館問題

投稿「胸襟を開いた話し合いを」

4月以来、友の会の帰属先が宙に浮いたままだ。友の会なのに、相手にすべき「友」がないのである。なぜなら、信頼すべき友人から絶縁状を突きつけられたからだ。

事の発端は3月末、当時の財団法人札幌彫刻美術館から多くの会員に届いた理事長名の文書だった。文書には、同財団が解散し、美術館は新たに財団法人札幌芸術文化財団に統合され、名称も本郷新記念札幌彫刻美術館としてスタートすること、解散に伴い友の会とは関わりがなくなったこと、今後のことは札幌市および新たな財団と協議することなどが記されていた。美術館の運営母体が替わったのだから、もう友の会とは関係ないというわけである。

諸般の事情で美術館の運営組織が替わったのだから、今後は新しい組織と協議してほしいというのは理解できる。しかし、「友の会とは関わりがなくなった」というのが引っかけた。

いろいろな経緯があったにしろ、1981年の美術館開設と同時に発足した友の会である。26年という長い歴史の終止符をこんな一片の文書の一言で終わらせる美術館の神経が分からない。本来なら、組織替えに伴い、友の会も新しい美術館の下で活動を継続できるように配慮するのが美術館としての態度ではなかったか。友の会に対する美術館の対応に釈然としない思いがした。

友の会の帰属問題が今後どう進展するのか、この先、友の会はどうなるのか—多くの会員にとって気がかりな時期に北海道新

友の会の帰属問題に対し、会員から匿名で投稿がありました。意見として掲載します。 編集者

聞に2度にわたってこの問題に関する記事が載った。7月7日朝刊の『友の会』に絶縁通告」と3日後の10日朝刊に掲載された「別の支援団体誕生へ」である。ここでは記事の全容を紹介するスペースがないが、最初の記事では、友の会の活動に対して市側が次のように述べている。「友の会は市の意向に沿った活動をしていない」「市が主体となって組織した団体ではない」「美術館活動を直接、支援しているわけではない」とあり、さらに、「美術館が求めているのは企画展案内状の発送などの事務作業。友の会の活動は直接の支援とはいえない」ともコメントしている。美術館の言い分を代弁した言葉のようである。

本当にそうなのか。だとすれば、なぜ、そうなったのかを考えてほしい。記事では直接の当事者である美術館側のコメントがない。残念である。

続報の「別の支援団体誕生へ」の記事にはさらに驚いた。友の会が二つになるようなものだ。兄弟げんかはごめんだ。

今、肝心なのは美術館と友の会の長年のあつれきを清算し、その上で相互の信頼関係を修復することだろう。簡単なことでないかもしれない。だが、友の会設立の初心に立ち帰り、関係者が文字通り胸襟を開いて話し合い、一日も早く円満な解決の道を見つけ出してほしいと切に思う。

札幌芸術文化財団理事長に申し入れ

友の会の拠点美術館問題で

札幌芸術文化財団がこの春以来、友の会に対して事務所の所在地として本郷新記念札幌彫刻美術館を使用しないよう通告した問題で、友の会は9月初め美術館を通して、同財団の上田文雄理事長(札幌市長)に対して次のような申し入れを行った。

申し入れによると、旧財団法人札幌彫刻美術館は設立以来、友の会が同美術館を拠点美術館として活動することを認めてきた。これは美術館が友の会に対して便宜供与を与えたもので、美術館の運営主体が替わってもこの権利は特定承継権として引き継がれる。したがって同財団が彫刻美術館を友の会の拠点美術館として認めないことと友の会の事務局を美術館に置くことを認めないのは信義、誠実の原則に反し、このことを強行することは権利の乱用であり、債務不履行になるとして同財団の通告を撤回するよう申し入れた。

札幌西ロータリークラブが彫刻清掃

友の会活動に賛同して大通公園で

友の会の「野外彫刻と街中の美を守ろう」キャンペーンに合わせて札幌西ロータリークラブの会員が9月29日、会員の支援を受けながら大通公園で彫刻清掃活動を行った。

メンバー25人のほか友の会会員も参加、「漁民の像」など5基を手作業で洗ったほか、バケット型クレーン車を使って、「黒田清隆之像」、「ホーレス・ケプロン之像」にも勢い良く放水して汚れを洗い流した。

「石狩」を訪ねて 福井 貴美子(会員)
空もやう気にしつつかぬ石狩の
海原はしるうさぎ波見ゆ
石狩湾に向かひ建つ無辜の民の像を
思ひかなひて今日は来て見る
無辜の民の像の台座に本郷新の
分骨なりせば黙禱ささぐ
砂丘を埋めむばかりひるがほの
咲き満ちをれば屈まりて見ぬ
花の季すでにすぎたる浜豌豆
さみどり淡き実莢をつけて

■「花王」市民活動助成事業は選外に■

今年5月に友の会が応募した、花王の市民活動助成事業「コミュニティーミュージアム・プログラム2007」の選考が行われ、友の会活動が選外になったとの報告がこのほど花王から届いた。

展覧会案内

■第23回北海道テキスタイル協会作品展

10月9日—14日 大丸藤井セントラル

(同協会代表で友の会会員の戸坂恵美子さんも出品)

編集後記 友の会の帰属問題がまだ解決していません。この問題についての会員からの投稿を掲載したため、「抜海の目」は休載しました。(大内)

彫刻美術館友の会 会報「いずみ」No.21

2007年10月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025